

診察室

年に一度のワクチン接種の後に、「もう十六歳ですから、体調がいつ急変してもおかしくありません」と院長が言った。たしかに、体重減少、難聴、俊敏さもなくなり、昔のままなのは食欲だけだ。

視線の先の診察台で暴れて放尿後、他人事のようにすましているのは私の老猫だ。この院長には猫、犬、猫と四十数年間診てもらい、みんな十五歳前後まで長生きしてくれた。開業された当時の動物病院は、国道沿いのスーパリーの前の狭い所で、院長が受付、看護師、精算まで兼務されていて、よくカウンターの前に一人ポツンと座っておられた。待ち時間もなくすぐに診てもらえたのは、今ほどペットブームではなかったからだだった。それから数年後には百メートル離れた場所に、三倍ほどの規模の病院と自宅が建った。

当時の私は転居して犬を飼っていたが、以前からの掛かりつけである病院に、車で一時間かけて通院した。その後の病院は現地で増改築を繰り返し、今では市内一の規模で獣医師も四人になった。待ち時間の案内や診察室への呼び出しをするのは、機械による女性の声だが、丁寧な診察と説明には変わりはない。

開業時には痩せていた院長は、病院と同じように大きくなり、後ろ姿は別人に見える。そのせいか、うちの犬と同じ背骨の病気で長期入院をされたらしい。診察室を出る時に「お大事に」と声をかけられたが、「センセイもニヤ」と私の老猫が言った。

(信)